香芝市埋蔵文化財発掘調査概報16

―平成14年度―

2003

香芝市教育委員会

序　　文

香芝市は奈良県の北西部、『万葉集』にもうたわれた二上山の麓に位置します。

この二上山からはサヌカイトや凝灰岩、ざくろ石などが産出し、これらの石はそれぞれの時代において盛んに利用され文化の発展に寄与しました。サヌカイトは２万年前の旧石器時代からおもに石器の素材として、凝灰岩は古墳時代以降に石棺や寺院・宮殿の基壇の化粧石、さらには石仏や石塔などにも使われました。そして、ざくろ石は明治以降に研磨材などに使われ、近代産業の発達に大きく貢献しました。

さて、今回報告する尼寺廃寺は、平成３年度より範囲確認調査を行ってきた遺跡です。これまでの調査で南北２つに分かれる寺院跡で、北廃寺は東向きの法隆寺式伽藍配置であったことが判明しています。とりわけ、塔跡からは現存するものとしては日本最大の心礎とその心柱の柱座から耳環や水晶玉がみつかり、一躍全国にその名が知られることになり、平成14年３月19日には国史跡に指定されました。

しかし、北と南の関係がまだ十分に解明されておらず、昨年から本格的な確認調査をおこなっております。とくに本年度は般若院境内を中心に調査し、大きな成果がありました。この調査を実施するにあたり、檀家総代の谷村秀雄氏をはじめとする檀家の方々のご理解とご協力、さらに、尼寺自治会長の石峯義隆氏には多大なご配慮を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

平成15年３月

香芝市教育委員会

教育長　山　田　勝　治

例　　言

1．本書は、香芝市教育委員会が平成14年度の国庫補助金事業（事業名：市内遺跡発掘調査）として実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2．発掘調査は香芝市が事業主体となり、香芝市教育委員会事務局生涯学習課二上山博物館主査山下隆次が担当した。
3．発掘調査に関する遺構や遺物の写真・図面等の調査記録、および出土遺物は香芝市二上山博物館（奈良県香芝市藤山１丁目17番17号）で保管している。
4．発掘調査を実施するにあたり、谷村秀雄氏（般若院檀家総代）、石峯義隆氏（尼寺自治会長）をはじめ地元の方々のご協力を得ました。ここに記して深く感謝申し上げます。

目　　次

調査位置図
尼寺廃寺南遺跡（尼寺廃寺第18次調査）
Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　遺跡の環境と概要……1
Ⅲ　調査の概要……2
1　調査の経過と検出遺構……3
（1）般若院境内……3
①Aトレンチ……3
②Bトレンチ……3
③Cトレンチ……4
④Dトレンチ……4
⑤Dトレンチ東拡張区……6
⑥Dトレンチ南拡張区……6
⑦Eトレンチ……6
（2）薬師堂……7
2　おもな出土遺物……8
（1）軒丸瓦……9
（2）軒平瓦……9
（3）熨斗瓦……9
（4）凝灰岩……11
Ⅳ　まとめ……11

第１図　尼寺廃寺位置図

平成14年度国庫補助金事業に伴う調査一覧

遺　跡　名	調査次数	調　査　地　番	調　査　期　間	調査面積
尼寺廃寺南遺跡	第18次	尼寺２丁目192，193－１	平成15年２月12日 ～同年３月21日	49㎡

尼寺廃寺南遺跡（尼寺廃寺第18次調査）

Ⅰ　はじめに

香芝市では近年、大阪のベッドタウンとして開発が進み、それにつれて埋蔵文化財の発掘届出件数も急増している。発掘調査も随時実施しているが、そのほとんどが小規模なもので遺跡全体の性格や範囲などを把握するには至っていない。したがって、遺跡全体としてとらえれば貴重なものもあるだろうが、範囲確認調査が追いつかないまま開発が進んでいるのが現状である。

そこで、遺跡の範囲や実態を把握し、今後の開発行為に対応するためのデータ収集と自己用専用住宅の建築に対応するため、昭和56年度以降、毎年国庫補助金事業を継続的に実施している。昭和56年度から平成２年度までは二上山北麓にひろがる旧石器時代を中心とする遺跡群を中心に発掘調査を実施した。続いて、平成３年度から平成９年度にかけては、次第に遺跡推定範囲に開発が迫ってきた尼寺廃寺の範囲確認調査を行い、北廃寺が７世紀後半に創建された東向きの法隆寺式伽藍配置であったこと、さらに、寺域もほぼ解明されたことにより保存に向けての資料が蓄積された。そして、平成11・12年度は平野２号墳を調査し、これまで不明であった墳丘南斜面に開口する横穴式石室を検出した。この石室の側壁は花崗岩の巨石を縦方向に使って構築され、玄室床面は棺を置いた部分を土などで固め、その他は全面に凝灰岩の切石を敷き詰めていた痕跡が検出され、さらには、棺を受ける台と考えられる浅い容器状の破片も出土するなど、この時期の古墳の変遷を考える上で貴重な成果があった。なおこの間、平成12年度には範囲確認調査がほぼ終了した尼寺廃寺（北廃寺）の中門推定地において自己用専用住宅の建て替えが計画され、その事前発掘調査で推定通りの位置で中門が検出された。これにより、ようやく北廃寺の伽藍配置が確定した。これを受けて平成13年７月に史跡指定申請書を提出し、平成14年３月19日に国史跡として告示された。

Ⅱ　遺跡の環境と概要

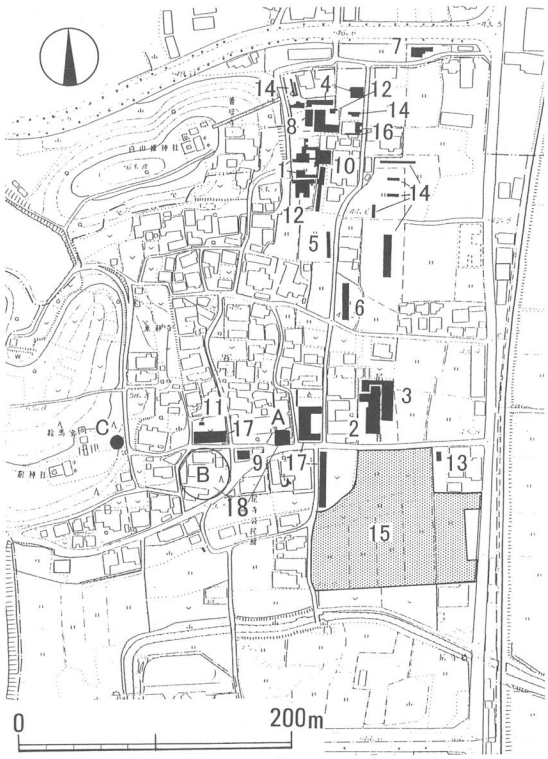
尼寺廃寺は奈良県香芝市尼寺に所在する飛鳥時代から白鳳時代に創建された寺院跡である。古くから尼寺の集落内で布目のついた古代の瓦が多く出土し、現在もいたるところで散見できることから寺院跡の存在が考えられてきた。しかし、瓦が南北約200m隔てて存在する礎石が残る基壇を中心に分布し、また、南と北のほぼ中央付近に谷が存在することなどから、南北２つに分かれる寺院跡と考えられてきた。

そこで、実態不明な寺院跡を解明するため、平成３年度から９年度までおもに国庫補助金事業による範囲確認調査を継続して実施した。この間、平成７年度に実施した北廃寺塔跡の調査においては、現存するものとしては日本最大の心礎が見つかり、その柱座から耳環12点や水晶玉４点などの舎利荘厳具が出土し、さらに、塔基壇構築法がはっきりするなど多大な成果があった。この塔跡の調査以降、尼寺廃寺の重要性が指摘されるようになり、保存へ向けての範囲確認調査が急がれることになった。

そして、平成９年度には未確認であった東面回廊や南限と東限を画す築地状の遺構を検出し、ほぼ寺域と東向きの法隆寺式伽藍配置であったことが確認された。しかし、中門が未確認であることなどの理由から保存策が進まなかったため、平成12年度には中門推定地で個人住宅の建て替

えが計画された。やむなく発掘調査を実施したところ、ほぼその推定通りの位置で中門が検出され、東向きの法隆寺式伽藍配置が確定した。

一方、南廃寺は役行者をまつる薬師堂に礎石がいくつか残っており、その西約50mにある般若院境内でかつて多くの軒丸瓦や軒平瓦が出土したことから、伽藍が般若院を中心に存在したと推定されている。この般若院周辺において、個人住宅建築に伴う小規模な調査や範囲確認調査も実施したが、伽藍に関係する遺構は検出されていない。昨年度の調査では斑鳩寺の創建瓦の１つである軒平瓦（斑鳩寺213Ｂ）や笵傷の少ない坂田寺式軒丸瓦が出土するなど、北廃寺より創建がさかのぼる可能性のある遺物が出土している。しかし、地割から回廊の存在が推定される位置を調査したにもかかわらず、出土した瓦の量は調査面積に対して少ないことから、回廊等の存在が疑問視される結果となった。また、伽藍推定地の東から南東部分においては、民間の開発事業が計画されたことから大規模な調査を実施している。その結果、多数の掘立柱建物跡や井戸などが検出された。これらの遺構は南廃寺の造営集団、あるいは寺院に関連する集団の建物群等の可能性が想定されており、北が寺院の空間であり、南は生活空間であった可能性が想定されている。



第２図　調査位置図　＊数字は調査次数を示す
Ａ.薬師堂　Ｂ.般若院　Ｃ.尼寺窯

なお、これまでの調査で南廃寺においては伽藍に関係する遺構を検出していないことから、遺跡地図では尼寺廃寺南遺跡としている。

Ⅲ　調査の概要

北廃寺は東向きの法隆寺式伽藍配置であったことを確認しているが、南遺跡は伽藍の中心と推定される部分にすでに家屋が密集しているため調査できず、まったく不明な状況にある。昨年度の調査においては、伽藍の一部にかかると考えられる位置を中心に調査したが、寺院に関係する遺構はまったく検出されなかった。

したがって、今回の調査はかつて軒瓦がまとまって出土し、南遺跡の中心と考えられる般若院の境内、および薬師堂と呼ばれる礎石が残る基壇を調査し、その性格を解明することを目的に実施した。両者は直線にして約50m離れており、さらに、方位が合わないことから、四天王寺式や法隆寺式などの伽藍配置でとらえるとかなり無理が生じる。そして、ほぼ中間地点で自己用駐車場の建築に伴って調査したが、寺院に関係する遺構は検出されなかった。したがって、それぞれ別のものとしてとらえた方が南遺跡の伽藍配置を考える上では理解しやすいと考えた。

また、昨年度の調査で斑鳩寺の創建瓦の１つが出土したことから、創建一族についても上宮王

家との関係が問題となった。そして、般若院においてはかつて現本堂の北東部分の雨落ちから坂田寺式軒丸瓦や奈良時代中ごろの軒瓦がまとまって出土し、さらに、本堂が版築された基壇の上に建てられていることから、この基壇が創建当時のものである可能性も考えられた。したがって、この基壇が創建当時のものであれば、周辺に伽藍に関係する遺構等が存在する可能性や、斑鳩寺の創建瓦が遺構に伴って出土もすることも期待された。さらに、境内には軒瓦を含む大量の瓦が地表面に散乱しており、自由に採集できる状態にあることから放置できない状況にもあった。

一方、薬師堂は保井芳太郎氏の『大和上代寺院志』によれば６個の礎石が報告されている（第４図)。現在、原位置を保っていると考えられる礎石が１個あり、移動していると考えられるものが４個ある。さらに、保井氏の報告では見取図に記載されており、今は地中に埋没していると考えられる礎石が１個あることから、この礎石と原位置を保つと考えられる礎石について調査することにした。また、薬師堂からはかつてかなり腐食が進んだ刀が出土し、再度埋め戻したと伝えられていることから、これらの刀が基壇荘厳具の可能性であることも考えられた。しかし、中途半端な調査になる可能性もあることから、埋め戻された刀については調査せず、礎石が原位置を保っているかどうかの確認だけに留めることにした。

１　調査の経過と検出遺構

（１）般若院境内（第３図）

般若院は東の門を入ると幅１ｍ、長さ15ｍの参道が本堂に向かってまっすぐのびている。そこで、現本堂の正面にあたる本堂の東側雨落ち部分において参道の両脇にトレンチを設定した。

①Ａトレンチ

参道南側において本堂東端の縁石と参道に接して、南北５ｍ、東西幅は参道側で２ｍ、本堂側で３ｍのトレンチを設定した。この位置には数年前に植樹されたそてつの木があり撹乱が予想された。しかし、掘削すると上層でも瓦の堆積がみられたが、地表面から約35㎝の深さで大量の瓦がほぼ水平に堆積している状況を確認した。瓦のほか凝灰岩の破片も多数出土した。出土した凝灰岩のほとんどは直径３㎝以下のものか砕けて粉状となったものである。一辺10㎝をこえるものは２点しかないが、いずれも加工した面が残っている。なお、瓦等が堆積する範囲は本堂の縁石から東へ約１ｍほどの範囲であり、堆積層には焼土がまったくないことから、建物が自然崩落した可能性が考えられる。瓦は地山の上に堆積する層厚約30㎝の整地土上でほぼ水平に堆積しているが、本堂南側の縁石から南へはゆるやかな傾斜で下がっている。出土した軒瓦は坂田寺式軒丸瓦２点、単弁16弁蓮華紋軒丸瓦４点、偏行唐草紋軒平瓦15点、均整唐草紋軒平瓦（6717Ｂ）２点で、その他、熨斗瓦が４点である。

この瓦の堆積を取り除いて平面を精査したが、雨落ち等の遺構はまったく検出されなかった。このことについては、瓦の堆積が本堂側へ続いていることから、雨落ちが残っているとしても、もう少し本堂側であると考えられる。

②Ｂトレンチ

参道北側において東西３ｍ、南北1.2ｍのトレンチを設定した。しかし、Ａトレンチのように瓦が軒から崩落した状態ではなく、撹乱を受けた状態で検出され出土量も少なかった。かつて本堂北東部の雨落ち付近で坂田寺式軒丸瓦１点をはじめ、偏行唐草紋軒平瓦や均整唐草紋軒平瓦（6717Ｂ）がまとまって出土した場所かもしれない。なお、このトレンチにおいても地表面から

約35cmの深さで約10～15cmの厚さで堆積する水平の整地層が検出されている。出土した軒瓦は坂田寺式軒丸瓦１点、偏行唐草紋軒平瓦１点、複弁蓮華紋軒丸瓦（6276G）１点で、その他、熨斗瓦が３点である。

③Cトレンチ

本堂北側で本堂と庫裏との間の雨落ちに東西2.4m、南北0.6mのトレンチを設定した。このトレンチでは表土直下で地山となり、整地土も検出されず、瓦もほとんど出土しなかった。しかし、直径35～40cm、深さ約30cmのピットが１基検出された。掘り方は直径約60cmの円形である。このピットは地山から掘り込まれているが、地山の上の整地土等が確認されなかったことから、どの時期に掘り込まれたかは断定できない。ただ、かつて本堂が北へ続いていたとすれば、この位置は本堂の下となることから前身建物の可能性が考えられる。また、本堂の基壇端がほぼ創建当初の位置であれば足場穴の可能性も考えられる。いずれにせよ調査可能な面積が限られていたため、将来的に本堂が建て替えられるのを待って調査するしかない。

以上、本堂周辺で３ヶ所調査した。南東部では瓦が軒から崩落した状態で堆積していたが、北東部では撹乱を受けていたが瓦は整地土上に水平に堆積していたことから、東側は本来の雨落ちに近い状況を示していると考えられる。

一方、北側では寺院造営に伴う整地土が検出されず、表土直下で地山が検出された。このことについては、地形的に北側が高いことから寺院造営に際して旧地表をすべて削平して整地された可能性が考えられる。

これらの状況から考えると、本堂が建てられている基壇は創建当初のものである可能性が高く、東側はほぼ当時の雨落ちであったと考えられる。

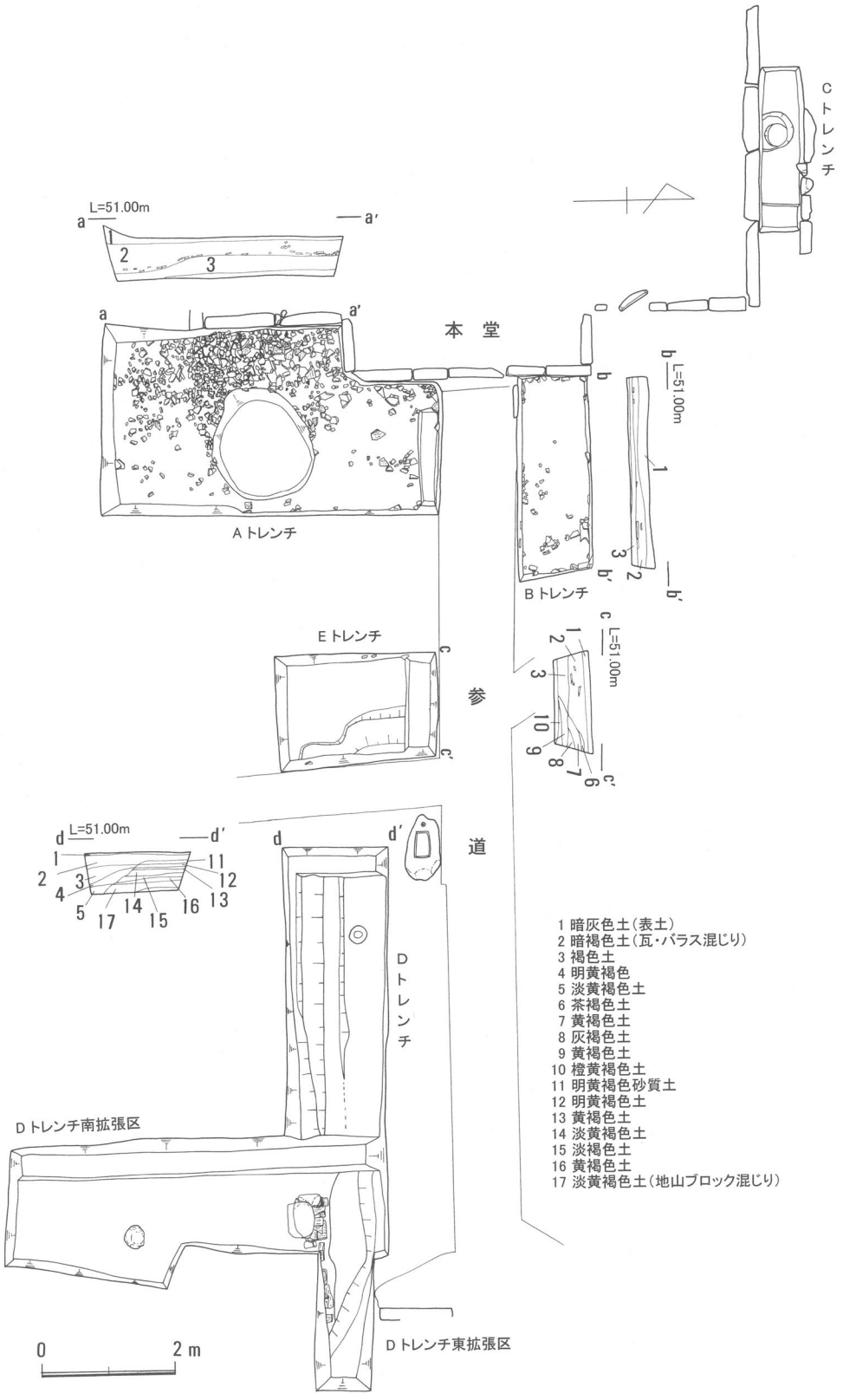
④Dトレンチ

東の門を入ってすぐ左側（南側）に礎石が１個ある。かつては２個あったが１個は持ち出されたらしい。この礎石周辺の地表面には大量の瓦が露出している。

そこで、これらの瓦が後世の整地等によってこの周辺に散乱して露出しているのか、また、何らかの遺構が地下に存在するのかを確認するため東西６m、南北1.6mのトレンチを設定した。このトレンチでは約10cmの表土を除去すると、北半分が堅くしまった土で南半分はやや柔らかい堆積となっていた。そこで、この違いを断面で観察するため、西側で断ち割りをおこなった。その結果、北側は地山の上から７層の版築層が確認され基壇であることが判明した。

検出した基壇はトレンチ北側から幅約0.6mの平坦面があり、そこから直角に約20cm落ちて約30cmの平坦面がある。直角に落ちるラインは東西方向にまっすぐ続いており、仮に基壇が凝灰岩の壇上積みであったとすれば、羽目石を据えるための平坦面であった可能性が高い。そして、この平坦面の南端から約10cm落ちて南側はほぼ平坦となっていることから、この位置に地覆石が据えられていたと考えられる。この部分をまっすぐ東へ延長した位置で凝灰岩の切石が検出された。この凝灰岩は南面に段がついており、やや北に向かって傾斜していることから、原位置を保っているとすれば階段の可能性がある。なお、この凝灰岩の切石の中心は、後にEトレンチで検出した基壇の西端から約7.45mの位置にある。

次に基壇構築について、基壇南端から約0.6mの位置から掘り込み地業をおこなっている。この掘り込んだ部分には礫が混じる粘土質の土を周囲の地山と水平になるまでかなり堅く突き固め



第3図　般若院境内調査実測図

ている。なお、この掘り込み地業の部分については、あまりにも堅すぎたため地山まで掘ることができなかった。そして、その上に約５～８cmの厚さで粘土質の土と若干砂の混ざった土を交互に積み上げている。この版築は北廃寺塔跡と同じ状況である。検出した基壇の高さは整地土上面から約0.5mである。

⑤Ｄトレンチ東拡張区

Ｄトレンチで基壇の両端が検出できなかったことから東へ２m拡張した。しかし、礎石があることから幅１mしか拡張できなかった。このトレンチでは基壇が東へ続く状況は確認したが、Ｄトレンチ北東部で検出した近世の土坑（東西約1.6m、南北約0.4m）が南東方向に向かって続いていたことから、基壇は東へ約1.5mしか検出できず東端は確認できなかった。

⑥Ｄトレンチ南拡張区

Ｄトレンチ南東隅で凝灰岩の切石が検出されたことや、基壇構築と寺院造営に伴う地業との関係を確認するため幅1.8mで南へ４m拡張し、西側で側溝を設定して地山まで掘削した。この拡張区でにおいてはＡトレンチの西側と同じ状況で、ほぼ一面に瓦が水平に堆積していた。また、トレンチ南端から約２mの位置で、トレンチの東壁にかかって凝灰岩が検出された。そこで、凝灰岩の全体を検出するため、この部分のみ東へ張り出す形でトレンチを拡張し、灯籠の竿である可能性が高いことを確認した。

また、西側の側溝において基壇構築とともに寺院造営に伴う地業を確認した。

寺院造営に伴う地業については、まず基壇を構築したのち地山の粘土が混じる土で基壇南端から約0.6m南までほぼ水平に突き固め、そこから地形にそって南へ緩やかに傾斜しながら積んでいる。そして、この南へ傾斜する部分がほぼ水平となるよう、トレンチ南端では約40cmの厚さで旧地表の土を客土し、それでも南側では緩やかに傾斜しているため、さらに地山の土を客土している。これら旧地表や地山の土は、地形的に高い北側を削平した際のものと考えられ、そのため先に削り取られた旧地表の土が下に堆積し、次に削られた地山の土が上に堆積したのであろう。そして、地山の土を客土した上にきめの細かい土を約20cmの厚さで水平に積み、最後に約25cmの厚さでやや砂質の土を積んでいる。この整地土の上で瓦が水平に堆積していた。なお、このトレンチにおいても焼土は検出されなかった。そして、この側溝の西壁面にかかって坂田寺式軒丸瓦が２点出土した。いずれも基壇端から1.5m以内で、軒から落下したと考えられる位置である。

なお、Ｄトレンチおよび東・南拡張区では大量の瓦とともに多数の軒瓦が出土した。出土した軒瓦は坂田寺式軒丸瓦７点、単弁16弁蓮華紋軒丸瓦２点、型式不明の複弁蓮華紋軒丸瓦１点、偏行唐草紋軒平瓦３点、均整唐草紋軒平瓦（6717Ｂ）に組むと考えられる単弁８弁蓮華紋軒丸瓦２点（同一個体の可能性もある）、その他、熨斗瓦が９点である。

⑦Ｅトレンチ

Ｄトレンチで検出した基壇の西端を確認するため、Ｄトレンチから約１m西側で東西1.3m、南北2.3mのトレンチを設定した。なお、Ａトレンチからは東へ２mである。

掘削の結果、トレンチ東端から約0.8mの位置で基壇の西端が、また、トレンチ北端から約2.1mの位置で基壇の南端が検出された。南端はＤトレンチで検出した基壇端と一致する。しかし、南西角については枯れた松の根があったため、確実な遺構としては検出できなかった。しかし、西端と南端を検出したことから南西角は確定できた。この結果、検出した基壇の東西長は約9.8

mとなり、それ以上の規模をもつ基壇であったことが判明した。また、現本堂との位置関係については、本堂東側の地覆石から基壇西端までは5.8m（本堂正面階段の地覆石からは５m)、本堂南側の地覆石から北へ約1.7mの位置に検出した基壇の南端がくる。今後、本堂の基壇が確認されれば、正確な位置関係が把握できるであろう。

なお、基壇構築等を確認するため北側のみ断ち割りをおこなった。

その結果、基壇は地山の上から土を積んでおり、Ｄトレンチでみられた掘り込み地業は確認できなかった。ただし、基壇端から約0.4mしか断ち割れなかったため確認できなかったと考えられる。というのも、Ｄトレンチでは基壇端から内側へ約0.6mの位置から掘り込み地業をおこなっており、この西側においても、地山の直上に積まれていた土がＤトレンチにおいては掘り込まれた部分に堅く突き固められていた土と同じであったからである。

以上、般若院境内の調査では、現本堂がほぼ創建当時の基壇を利用して造営されていることが判明し、さらに、本堂の東側においては新たな基壇を検出した。これによって、境内を中心に伽藍配置を検討する手がかりが得られた。

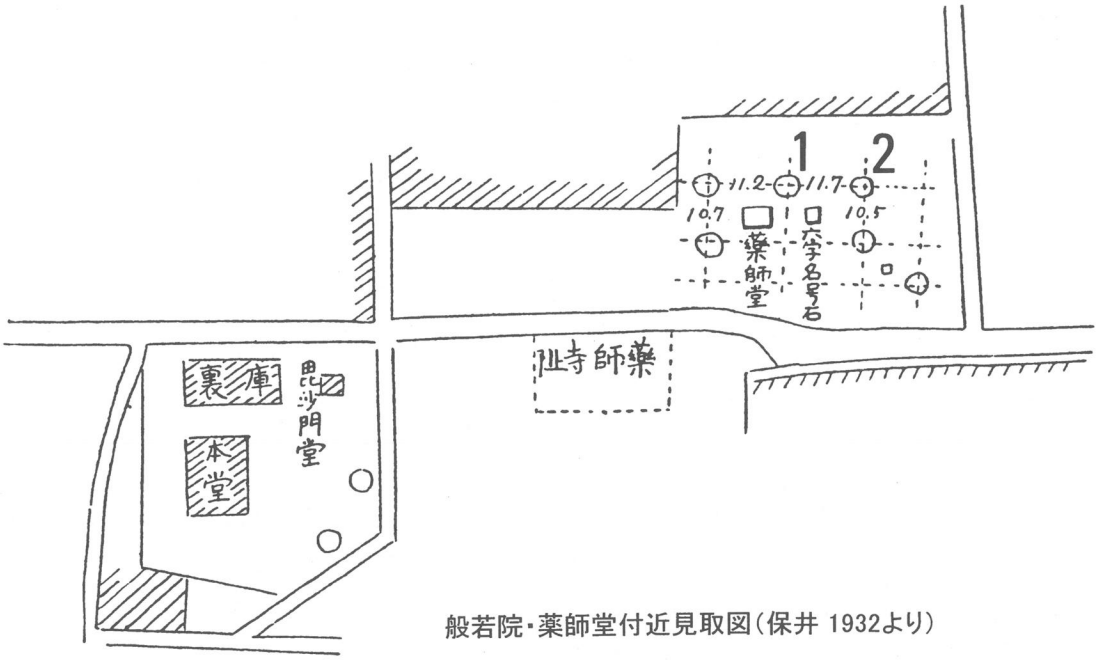
（２）薬師堂（第４図）

保井氏の『大和上代寺院志』の見取図をもとに、地中に埋没していると考えられる位置にトレンチを設定した。その結果、見取図通りの位置で礎石を検出することができた（礎石１)。この礎石は南北0.88m、東端は木の根のために確認することができなかったが、東西1.02m以上である。

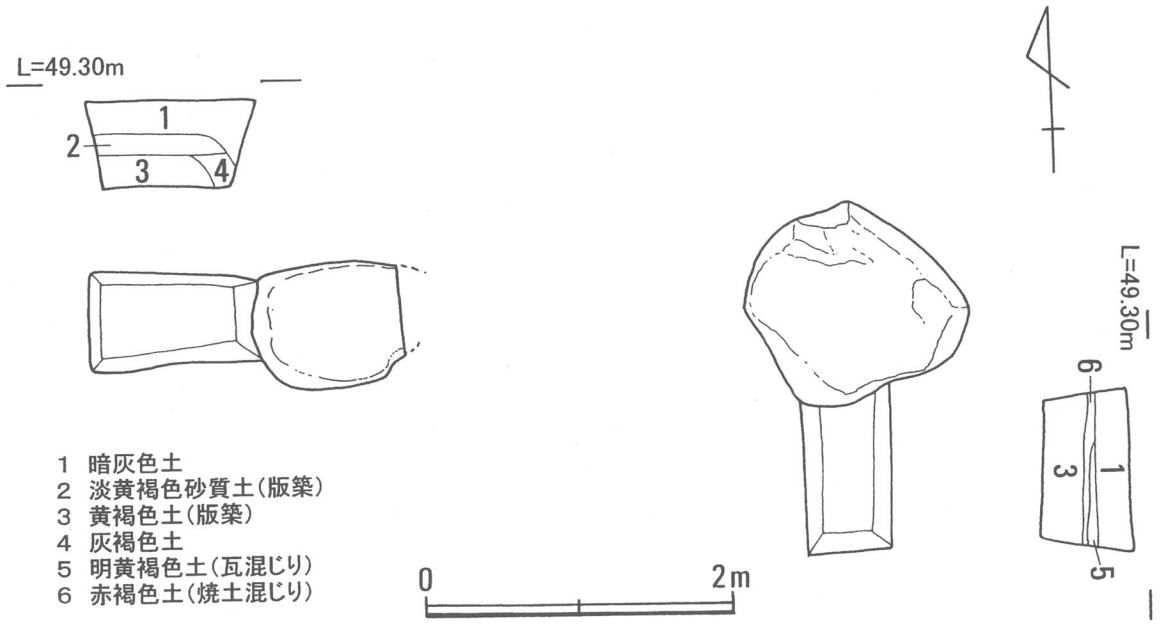
そして、西側で幅0.6m、礎石から約１mの範囲を約0.6m掘り下げ、礎石が原位置を保っているかどうか確認した。その結果、焼土混じりの表土の下で版築層が２層積まれ、下の版築層は礎石の端から約0.4mの位置で礎石の下へのびており、その部分にはやや粘土質の土が突き固めるようにして入れられている状況を確認した。これは礎石を滑り込ませて据え付けるための傾斜である可能性が高いと考えられ、この礎石が原位置を保っていることは確実であろう。また、礎石全体に火を受けたことによる変色も確認された。

次に、保井氏の見取図にも示され、以前から原位置を保っていると考えられてきた礎石（礎石２）を調査した。まず、礎石全体を検出し、南側で幅0.6m、礎石から約１mの範囲を約0.6m掘り下げた。その結果、礎石は南北1.36m、東西1.38mで西側のものより一回り大きい。そして、礎石の南側でも版築層が礎石に接している状況が確認されたことから、この礎石も原位置を保っていることが確実となった。なお、ここでも表土に混じって焼土が検出され、礎石も埋もれていた部分で火を受けたことによる変色が確認された。

以上、２つの礎石の位置関係がつかめたことから、柱間は約3.38m（約11.27尺)、高麗尺であれば約9.5尺に相当する。また、基壇構築については薬師堂が信仰の対象であることから大規模な調査はおこなわなかった。しかし、一部ではあるが版築層が確認され、何らかの堂宇が建っていたことが確実となった。ただし、版築層はそれほど丁寧なものではないことから、それほど重量のある堂宇が建っていたとは考えられない。なお、瓦片は出土したが軒瓦は１点もなかった。したがって、創建時期等については不明である。今後、この基壇の雨落ちが調査され、遺構に伴って軒瓦が出土する機会を待ちたい。



般若院・薬師堂付近見取図（保井 1932より）



第４図　薬師堂調査実測図

２　おもな遺物（第５図）

般若院境内と薬師堂を調査したが、薬師堂は小規模な調査であったため、瓦片は出土したが軒瓦等の時期を決める遺物は出土しなかった。したがって、ここでは般若院境内から出土した遺物の概要を報告する。

（1）軒丸瓦

1～6は坂田寺6Aと同笵の坂田寺式軒丸瓦で、いずれもDトレンチから出土した。昨年度の調査で出土したものと同じで、北廃寺から出土したものに比べて瓦当が薄く笵傷も少ない。瓦当径15.8cm、中房径3.6cm、瓦当厚は2.4～2.9cmで2.5cm前後のものが多い。丸瓦は未加工のまま接合するものがほとんどであるが、1点のみ丸瓦の凹面側を斜めに削って接合するものがある。瓦当側面、裏面とも丁寧なナデ調整を施す。12点出土しており、Aトレンチから2点、Bトレンチから1点、Dトレンチから7点、Eトレンチから2点である。Bトレンチのものはトレンチ東側で出土しており、本堂と新たに検出した基壇のほぼ中間地点にあたることから、いずれに伴うかは判断できない。この1点を除くと新たに検出した基壇の周囲から9点、本堂雨落ちから2点である。

7～11は単弁16弁蓮華紋軒丸瓦で7～9はAトレンチから、10・11はAトレンチから出土した。瓦当径16.5cm、中房径5.9cm、瓦当厚は2cm前後のものが多い。瓦当側面はヘラケズリ、裏面は斜め方向のヘラケズリのあとナデ調整を施し下半部を面取りする。2～4mmの笵のかぶりが認められる。6点出土しており、Aトレンチから4点、Dトレンチから2点である。

12は複弁8弁蓮華紋軒丸瓦で、Dトレンチから1点のみ出土した。蓮弁部分の破片のため中房の蓮子数等は不明である。北廃寺から出土したものと蓮弁の形状を比較すると、同じ型式のものはない。今後、全体がわかる資料が出土するのを待たなければならい。

13は外縁に唐草紋をめぐらす単弁8弁蓮華紋軒丸瓦である。瓦当径は16.5cm、中房径4.4cm、瓦当厚4.3cmである。瓦当側面には1.5cmの幅で笵のかぶりが認められる。かなり磨滅しており、調整等は不明である。均整唐草紋軒平瓦（6717B）と組むと考えられる。Dトレンチから2点出土しているが、もう1点は外縁の唐草紋の部分であり、13と同一個体の可能性がある。

（2）軒平瓦

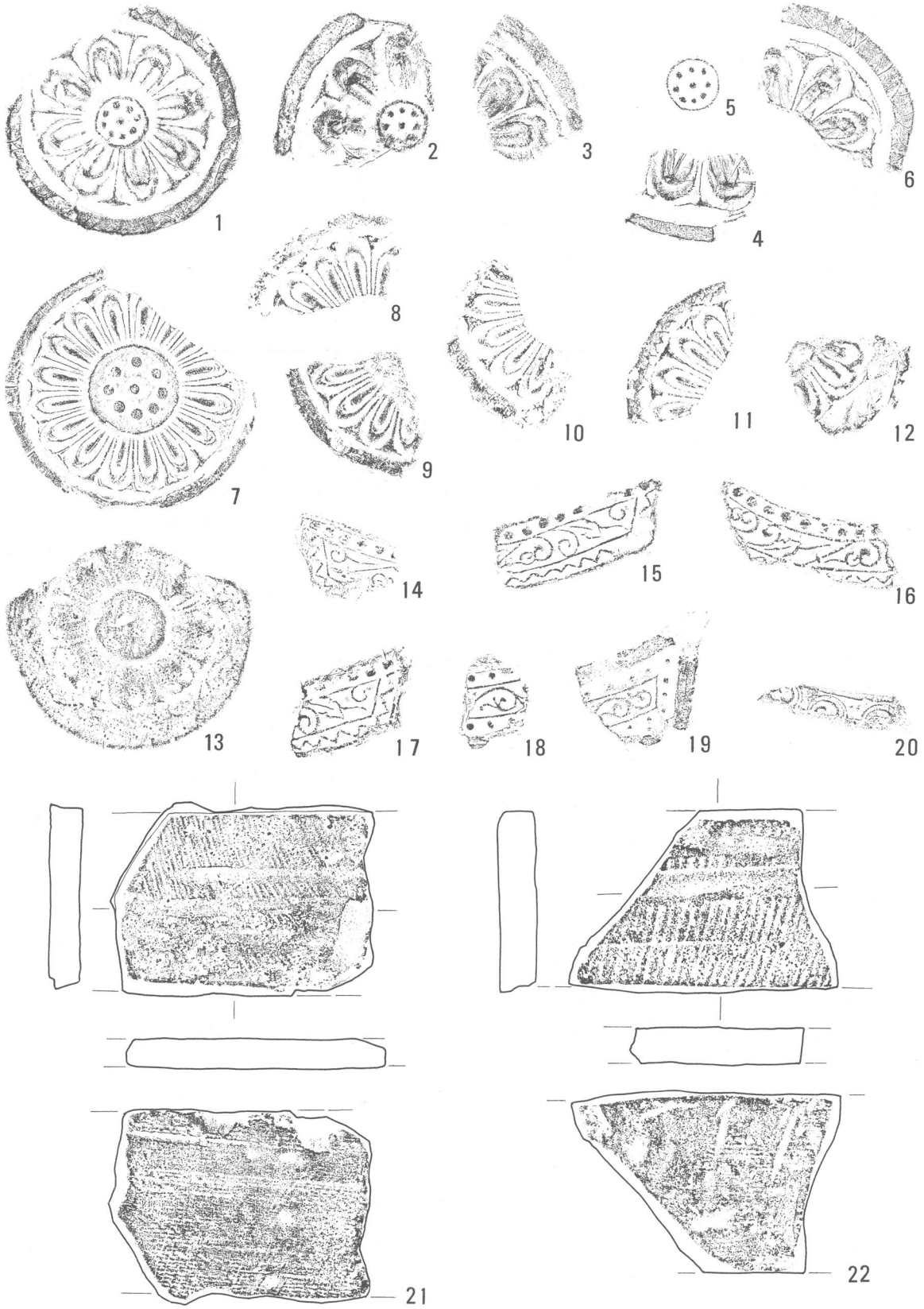
14～17はAトレンチから出土した偏行唐草紋軒平瓦で、内区に左から右に流れる変形忍冬唐草紋をおき、上外区に連珠紋、下外区と脇区に線鋸歯紋を配す。瓦当厚は4.5cmのものと5.5cmのものがあり、薄い方は直線顎であるが、厚い方はやや曲線顎となる。瓦当付近の凹面側は横方向のヘラケズリで調整する。平瓦凸面は瓦当付近を横方向のヘラケズリで調整するものと、全面にわたって縦方向のヘラケズリを施すもの、さらに、瓦当付近まで縄叩きを残すものがある。また、側面調整についても凹面側を面取りするものが2点あるが、その他は未調整である。19点出土しており、Aトレンチから15点、Bトレンチから1点、Dトレンチから3点である。

18・19ともにAトレンチから出土した均整唐草紋軒平瓦で、これまで出土しているものから6717Bと考えられる。瓦当厚は6.6cmで、Aトレンチから2点出土している。

20は連巴紋軒平瓦である。貼り付けの段顎と考えられるが顎が剥離している。Dトレンチの北東部で検出した近世に掘られた土坑から1点出土した。

（3）熨斗瓦

21・22ともにDトレンチから出土した。今回の調査で20点以上出土しており、これから整理が進むとさらに増加するものと思われる。すべて焼成後に分割した割熨斗瓦で、平瓦を平坦にして凹面、凸面とも斜め方向のケズリを施す。凸面に縄叩き、凹面には側板痕を残すものもあるが、ケズリによって消されているものもある。中には側板痕が残る部分のみ縦方向のケズリを施し側



第５図　般若院境内出土瓦（Ｓ＝１：４）

板痕を消しているものもある。幅は10.5cm、11.5～11.8cm、12.2cmの３種類があり、厚さも1.8～1.9cmと2.5～2.8cmのものがある。

（４）凝灰岩

Ａトレンチから凝灰岩の破片が多数出土した。ほとんどは直径３cm以下のもの、または、砕けて粉状となったものである。そのうち、形状がわかるものが２点あり、１点は縦12cm、横15cm、厚さ6.5cmで平坦に加工された面が１面残る。もう１点は縦11cm、横14cm、厚さ８cmで平坦に加工された面が３面残っている。

Ｃトレンチにおいて、加工された凝灰岩が２点出土した。まず、灯籠の笠と考えられるものは直径約40cm、厚さ約15cmで、椀を上下２段に伏せた形状を呈している。一部欠けているが全体の復元は可能である。もう１点は、基壇の南端で出土したもので、階段と考えられる。斜めに据えられており、高さ約40cm、幅約50cm、厚さ約20cmで、中央に段のふくらみがある。

Ⅳ　まとめ

昨年度の調査で伽藍に関係する遺構が検出できなかったことから、南遺跡では回廊等を伴わず、堂宇も地形に沿って建てられていたと考え、四天王式や法隆寺式のような伽藍配置をとっていなかったと推定した。しかし、今回の調査によって般若院境内から新たな基壇が検出され、しかも、大規模に整地して寺域を造成し、基壇構築についても掘り込み地業をするなど、かなり丁寧な造営をおこなっていたことが確認された。さらに、本堂の東側雨落ちから軒瓦を含む大量の瓦が出土したことから、本堂が創建当初の基壇の上に再建されている可能性が高くなった。したがって、本堂と新たに検出した基壇の方位がそろうことから、東西方向に２つの堂宇がならんでいたことが確実となった。本堂の下に存在すると考えられる基壇の規模は未確認であるが、今回の調査で東端が検出されなかったことから、もう少し西に位置すると考えられる。現状で本堂東側の地覆石から新たに検出した基壇の西端までは5.8m（約19.3尺）であることから、20尺ほどの間隔があったと推測される。また、本堂南側の地覆石から北へ約1.7mの位置に検出した基壇の南端がくる。したがって、本堂の基壇の南端が未確認であるが、新たに検出した基壇の南端の方が少し北に位置し、一回り小さいのは確実であろう。

かなり窮屈な感じもするが、地形的に北から丘陵が迫り、南は尼寺川が流れる低地となっているという地形的な制約があったことは否めない。当時の地形はおそらく北から南へ緩やかに傾斜していたと推測され、寺院造営にはかなり大規模な造成を必要としたと考えられる。現状で般若院の南側は約３mの崖となっている。この崖は寺院造営にともなって形成されたと推測され、それぞれの堂宇がおさまるよう最小限の造成に留めて寺域を確保したと考えられる。したがって、伽藍を想定するにはかなり狭い範囲ではあるが、般若院境内を中心として１つの伽藍が存在した可能性が高くなったといえよう。そして、この伽藍の正面は地形的に南側が崖となっていることから東であった可能性が高いと考えられる。もし東が正面であれば、今回検出された基壇と本堂が一直線にならぶことから東向きの四天王寺式伽藍配置を推定したい。来年度、基壇の北端を確認するため再度境内を調査する予定であり、結論は今後の調査の結果を待ちたい。

次に、薬師堂についてであるが、今回の調査で何らかの堂宇が建っていた基壇であることが明らかとなった。しかし、軒瓦が出土しなったことから時期は確定できないが、焼失したことは確

認できた。基壇については堅固な版築で構築されていなかったことから、塔のような重量のある堂宇は建っていなかったと考えられる。また、柱間も約3.38mであることから唐尺では約11.27尺、高麗尺では約9.5尺に相当し、塔跡でないことは確かであろう。もし推測が許されるならば、仏堂の身舎の梁行を想定したい。

また、般若院と薬師堂の関係については互いに関係があったとしても、別の性格をもっていた可能性が考えられる。般若院は今回の調査で新たな基壇が検出されたことから１つの伽藍として存在し、薬師堂は仏堂として独立していた可能性が高くなったと考えられる。さらに、両者を造営した一族が違うと想定し、般若院は北廃寺も造営した敏達天皇系の王族、一方、薬師堂は上宮王家とその一族を考えたい。このことについては、般若院境内の調査において、良好な状態で軒から崩落した瓦が出土したが、斑鳩寺の創建瓦は出土しなかった。一方、昨年度の調査で薬師堂の東側において、江戸時代の土坑からではあるが斑鳩寺の創建瓦が出土している。したがって、薬師堂の雨落ちを確認していないので確実なことは言えないが、般若院境内の状況から考えると斑鳩寺の創建瓦が葺かれていた堂宇は薬師堂を想定するしかない。

次に、創建時期と廃絶時期について出土した瓦から考えたい。般若院境内で新たに検出された基壇の周囲からは坂田寺式軒丸瓦が７点出土しており、そのうちＤトレンチ南拡張区ではトレンチ幅が1.8mであったにもかかわらず７点出土している。したがって、この堂宇に坂田寺式軒丸瓦が葺かれていたことは確実であろう。また、本堂東側雨落ちにおいても坂田寺式軒丸瓦が２点出土しているが、もっとも多く出土したのは偏行唐草紋軒平瓦の11点で、次いで単弁16弁蓮華紋軒丸瓦が４点である。ただし、かつて本堂北東の雨落ちでは坂田寺式軒丸瓦１点と均整唐草紋軒平瓦（6717Ｂ）が多数出土している。そして、もっとも新しい瓦はＤトレンチ北東部で検出した近世の土坑から出土した連巴紋軒平瓦１点である。このことから、いずれの堂宇にも創建当初は坂田寺式軒丸瓦が葺かれていたと考えられ、創建時期は７世紀中ごろであることは確実であろう。そして、これらの瓦が焼け落ちずに崩落した状態で出土しそれ以降の新しい瓦が出土していないことから、平安時代のいずれかの時期に廃絶したと考えられる。

一方、薬師堂では軒瓦が出土しなかったことから創建時期の断定は難しい。今後の調査を待ちたい。

最後に、般若院を中心に１つの伽藍が存在していたとすると、北廃寺とともに７世紀後半には同時に南北２つの伽藍が存在していたことになる。創建については出土した瓦から南が先に造営されたことは確実である。また、尼寺廃寺の寺院名については般若寺の可能性が高く、般若寺は文献で尼寺とされ、さらに、今も般若院としてその名が残ることから南は尼寺であったと考えられる。もしそうであれば、後に造営された北廃寺は南との位置関係から僧寺であった可能性を考えたい。

参 考 文 献

香芝市教育委員会編　2002『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報15』香芝市教育委員会

保井芳太郎　1932『大和上代寺院志』

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいせいじゅうよねんど かしばしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう じゅうろく
書 名	平成14年度香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 16
副書名	
巻 次	
シリーズ名	香芝市埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	16
編著者名	山下 隆次（尼寺廃寺第18次調査）
編集機関	香芝市二上山博物館
所在地	〒639-0243 奈良県香芝市藤山１丁目17番17号
発行年月日	西暦2003（平成15）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
にんじはいじみなみいせき 尼寺廃寺南遺跡	ならけん 奈良県 かしばし 香芝市 にんじ ちょうめ 尼寺２丁目 192、193-1	292109	144	34度 34分 44秒	135度 42分 13秒	20030212 ～ 20030321	49㎡	範囲確認 調査
種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項				
寺院	飛鳥時代 奈良時代 平安時代	基壇、礎石、土坑、ピット	瓦片、須恵器片、	今回の調査で新たに基壇を検出し、南遺跡にも伽藍が存在した可能性が高くなった。				

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報　16

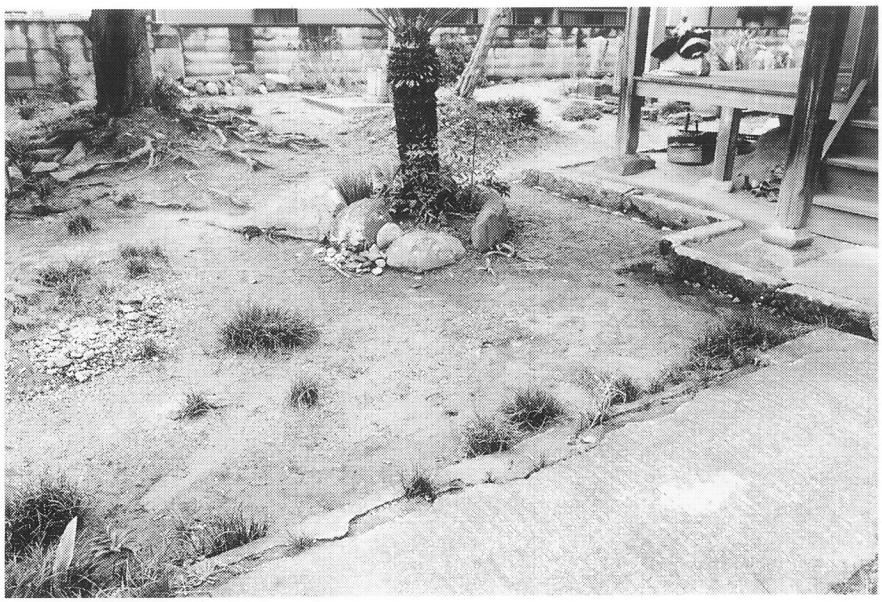
－平成14年度－

2003(平成15)年３月31日

編集　香芝市二上山博物館
〒639-0243 奈良県香芝市藤山１丁目17番17号
TEL. 0745-77-1700　FAX. 0745-77-1601

発行　香芝市教育委員会
〒639-0244 香芝市本町1397番地

印刷　堀内印刷株式会社
奈良県大和高田市春日町１丁目９－10
TEL. 0745-52-0557　FAX. 0745-23-2330



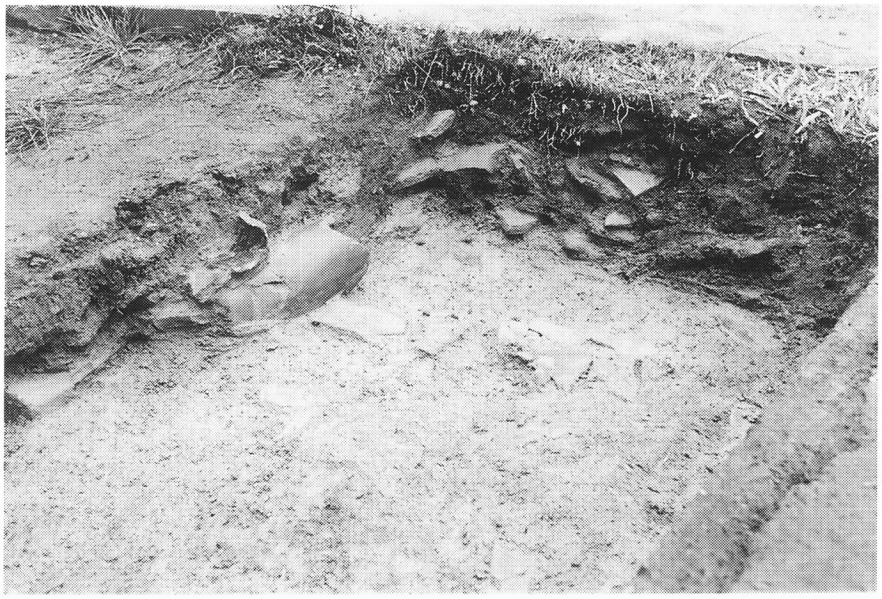
Aトレンチ調査前（北東から）

Aトレンチ瓦出土状況（北から）

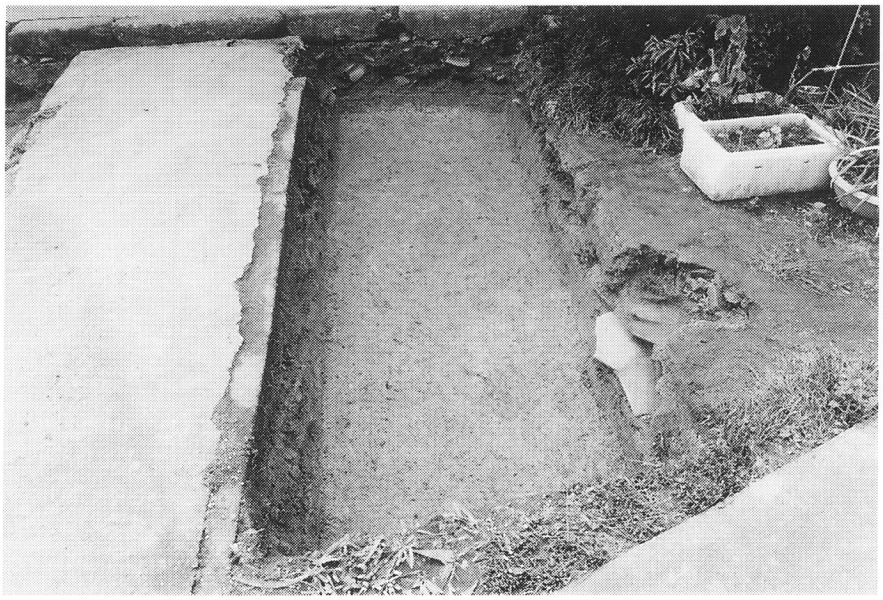
Aトレンチ完掘状況（北東から）

図版2

Bトレンチ調査前（東から）

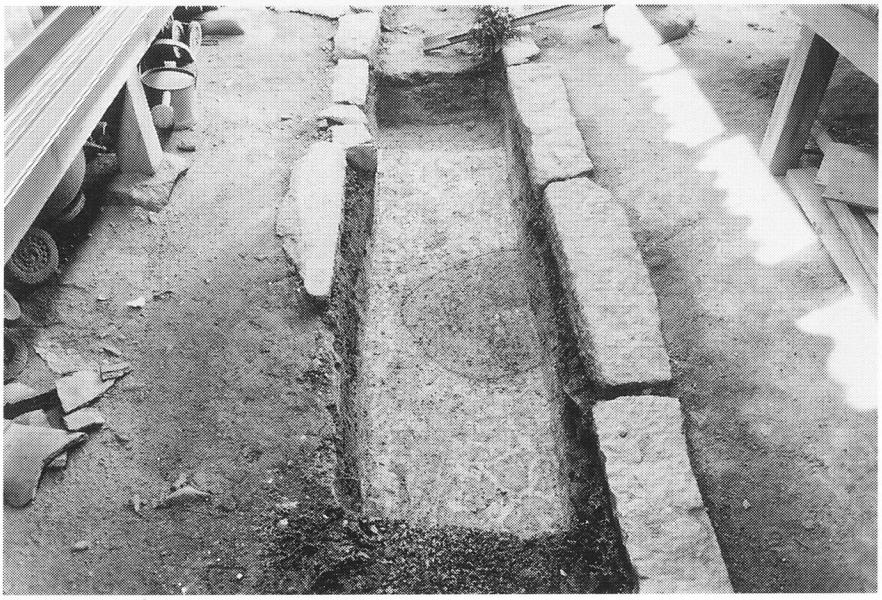


Bトレンチ瓦出土状況（南西から）

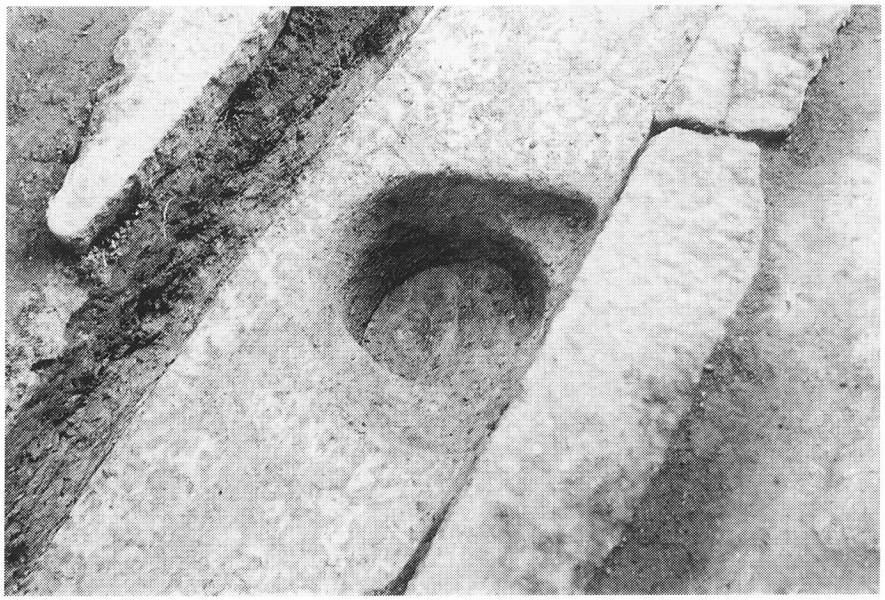


Bトレンチ完掘状況（東から）

Cトレンチ調査前（西から）

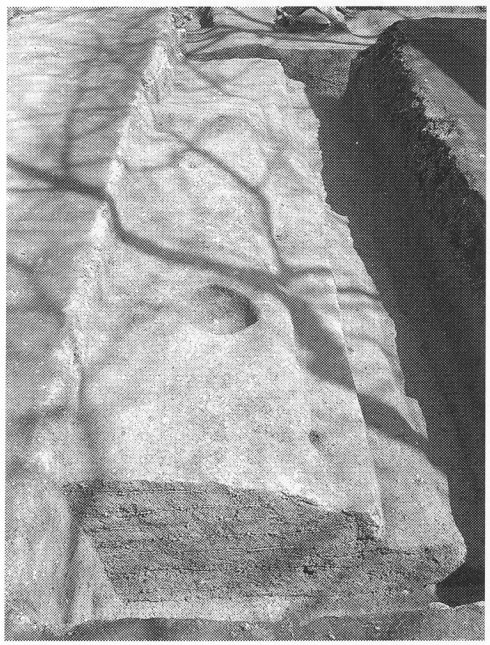


Cトレンチピット検出状況
（西から）

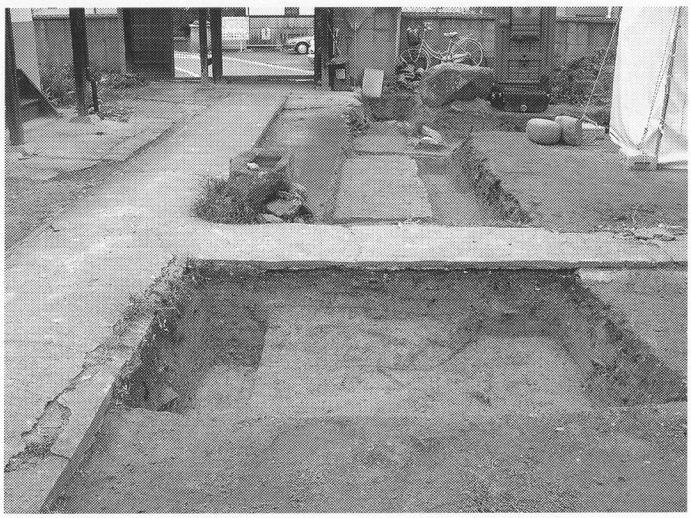


Cトレンチピット完掘状況
（南西から）

Dトレンチ基壇版築状況（南西から）



Dトレンチ基壇検出状況（西から）

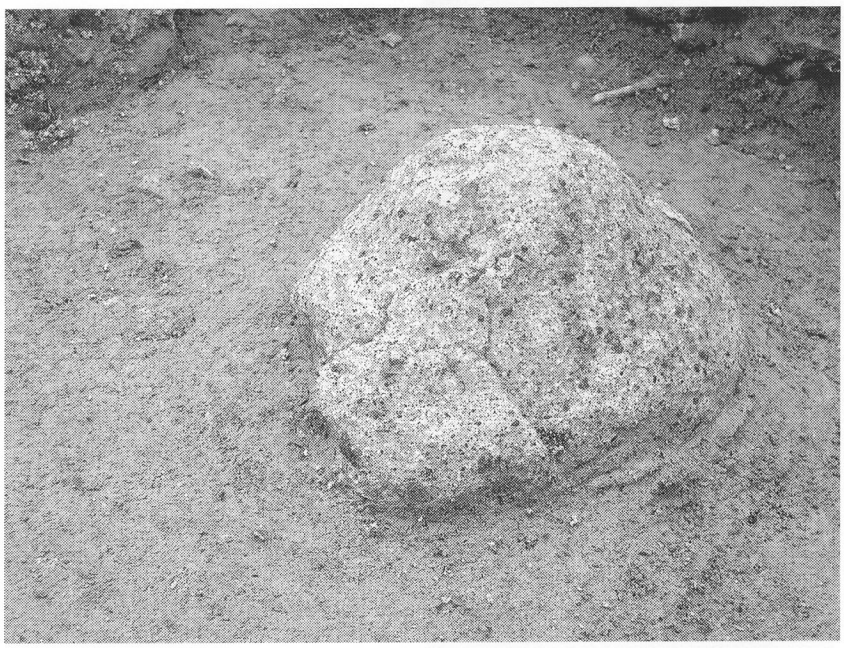


D・Eトレンチ基壇検出状況（西から）

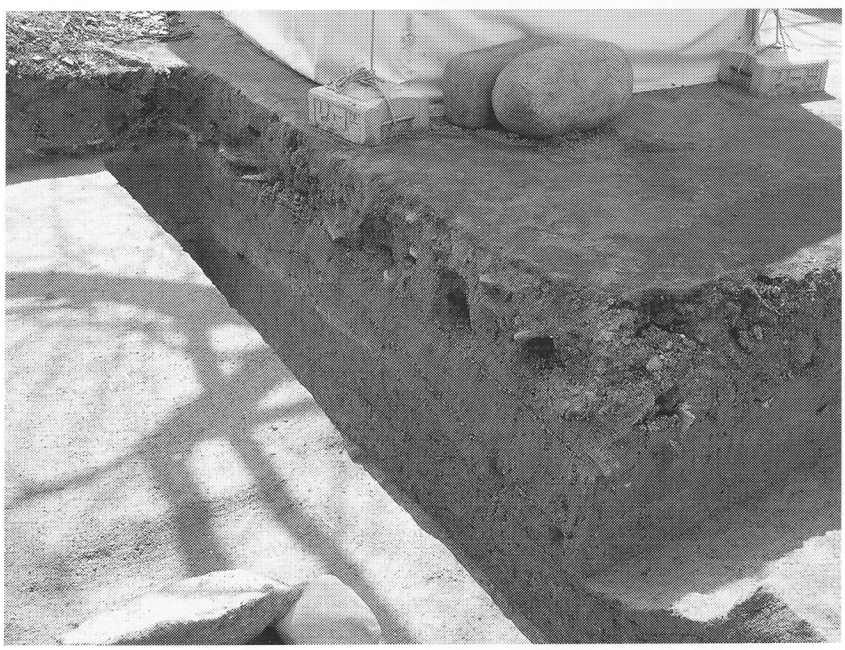
Dトレンチ基壇南端凝灰岩出土状況
（西から）

Dトレンチ南拡張区全景（南から）

Dトレンチ南拡張区完掘状況（西から）



Dトレンチ凝灰岩出土状況
（南から）



Dトレンチ南拡張堆積状況
（北東から）

薬師堂全景（南西から）

薬師堂調査前（東から）

薬師堂礎石検出状況
（北西から）

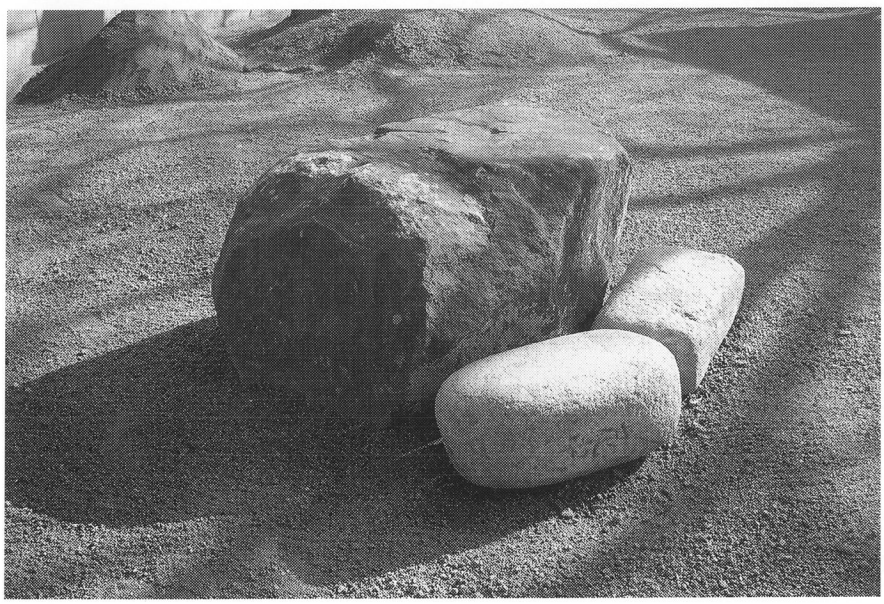
薬師堂礎石１検出状況
（南西から）

同礎石１付近の版築状況
（南から）

薬師堂礎石２検出状況
（東から）

薬師堂礎石１付近の版築状況
（東から）

般若院境内調査後（北東から）



般若院境内の礎石（北東から）